

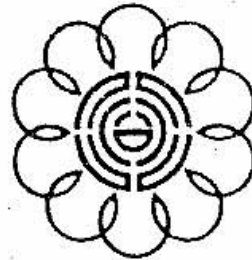
平成8年度

第28回 越谷市民文化祭

平成8年11月21日(木)～24日(日)

越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ



◇周りの10個の輪は、昭和29年11月3日に合併した十町村である

二町八ヶ村（「越谷町」の誕生）をあらわす。

十ちようせん町村とは、越こしヶ谷がや町・大おお沢さわ町・桜さくら井い村・新にい方がた村・増ましげ林やしん村・大おお袋ふくろ村・

萩はぎ島しま村・出で羽た村・蒲かむ生う村・大おお相あ模ま村をさす。

なお、市に昇格したのが昭和33年11月3日。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めたもの。

つまり、越谷の『越』（「コ4」）を意味する。

◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。

第28回 市民文化祭の 越谷郷土研究会展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
一	旧川崎・向畑・大吉・弥十郎村の石仏 (地券(明治初年の土地所有証券))	11 13	加藤 幸一	春日部市大枝
二	大沢の鎮守 香取神社	14	小島 誠	平方
三	明治初期の越ヶ谷の村落	15	鈴木 秀俊	宮本町二丁目
四	火消ポンプ 竜吐水	16 18	菅波 昌夫	南越谷一丁目
五	東京周辺の飛行場群と 幻の越ヶ谷飛行場	19	谷岡 隆夫	宮本町三丁目
六	疫病と鬼子母神	20 21	高橋 清	新川町一丁目
七	大松の清浄院	22	名倉 さわ	新川町一丁目
八	近藤勇 越ヶ谷宿にて逮捕	23	西田 茂	谷中町一丁目
九	越谷市内の火の見やぐら	24	堀切 祥民	北越谷一丁目
十		25	火の見櫓調査 宮川進	

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、

越谷市郷土研究会の谷岡隆夫(当会会長・☎6217527)までお願いします。

一 旧川崎、向畑、大吉、弥十郎村の石仏

加藤幸一

越谷の信仰や生活などを解明する貴重な石仏類が最近開発の波にのって葬られつつある。そこで今のうちに詳細に、かつ正確に記録し残しておきたいと旧川崎村・向畑村・大吉村・弥十郎村の江戸期の石仏類について調査した。詳細については北川崎の聖徳寺や大吉の徳蔵寺に資料を置かせていただくのでご請求(無料)願いたい。

一 旧川崎村

(1) 川崎神社

もとは香取神社と呼ばれた。正面の入り口に十数基程の力石が置かれている。力石とは江戸時代に人々が力試しに抱え上げた大石のことである。

また、すぐそばにはこの神社に敷石を奉納した人たちの名が刻まれた二基の敷石供養塔(図2と3)がある。

(2) 権現社跡地

古利根川に面したこの辺りにはかつては権現河岸があり、渡し場がみられ、吾妻権現社が祭られていた。今でも地元ではこの辺りを「権現様」と呼んでいる。

その名残として白石家(川崎一三一二)そばの十字路東側の角に水神宮文字塔(図4)がある。毎年七月二十二日はこの「水神様」(管理者は北川崎九一の山崎家)の縁日で、地元の人たちが小豆を供えて拜んだ。今でも地元川端地区の人たちが七月二十二日に最も近い日曜日になると川崎神社に集まり「水神宮」の集いを開くのである。

(3) 聖徳寺

聖徳寺では毎年五月二十二日に近郷の職人たちが集まって太子講が開かれている。

参道を歩いて行くと塩地蔵を安置している祠がある。塩の信仰のためにひどく摩耗してしまったこの地蔵尊(図6)には

聖徳太子に関する次のような言い伝えが残っている。

聖徳太子が蘇我馬子とともに、蘇我氏の敵である物部守屋を攻め滅ぼした。ところが討たれた守屋は実は地蔵の化身であった。このことを知った太子は守屋の供養のためにこの地蔵を自ら製作したという。

参道をさらに進むと右側に無縁仏の石塔群がみられる。その中には、両側面に「此方少行 西のみち 北かすかべ」「南こしがやみち」と刻まれた道標をかねた文字庚申塔(図9)を始め、貴重な石仏(図8から図22)が交じっている。

II 旧向畑村

(1) 堂面の観音堂

通称は「観音堂」と呼ばれているが、その東側隣には薬師如来を祭る建物もある。この地一帯は「花光院」と称され、徳蔵寺の兼務寺である。地元の堂面地区の人たちによって八月十日に「十日面」の行事が行われ、観音堂本尊の観音菩薩像前で観音経を唱えている。

この境内には「庚申」を「孝心」の言葉に結び付けた珍しい庚申塔(図3)がある。正面は「庚申塔」、裏面には「孝心」で庚申さまをよくおがめ 拜むその身はすぐにかうしん」と刻まれている。

(2) 向畑香取神社

参道にある祠には文化十二年(一八一五)の水神宮文字塔(図8)が安置されている。

(3) 北向き地蔵堂

北向きの地蔵尊(図9)を祭る地蔵堂には今でも地蔵講があり、かつては毎月二十四日に宿を持ち回りして行われていた。特に地蔵盆の八月二十四日は聖徳寺の住職を呼んで大々的に行われた。しかし、現在は三カ月に一回程度となり信仰が廃れてきている。

八月二十四日の地蔵盆には次のような民間信仰がみられる。

地蔵堂の両側に「地蔵尊」と書かれた提灯を掲げるが、提灯の中の使い切った短くなった蝋燭をいただき、お産の時にその蝋燭を立てて火をつけるとその蝋燭が燃え尽きるまでには赤ちゃんが生まれ、長く苦しむこともなく安産できるといわれ

た。それゆえ「子育て地蔵」とも呼ばれている。

(4) 十一面観音堂そば路傍

ここには四基の庚申塔があるが、その中で図16は初期の庚申塔（三猿塔）として貴重。

また図13の不動明王三尊像（慶応二年）と不動明王の家来である三十六人の童子を意味する図12の三十六童子文字塔（明治十一年）とがあるが、この地で成田山の不動信仰が当時盛んであったことがうかがえる。

なお、現在の越谷市内で幕末に造立されて現存しているこれ以外の成田山の不動明王三尊像をあげると次の通りである。

平方村東組共同墓地 文久四年（一八六四）

弥十郎村観照寺 慶応二年（一八六六）

七左衛門村観照院 文久四年（一八六四）

大泊村香取神社 年代不詳 慶応二か

平方村戸崎共同墓地 元治元年（一八六四）

船渡村香取神社 慶応二年（一八六六）

(5) 十一面観音堂

毎年八月十一日には『十一面』と呼ばれる行事が行われ、以前は観音経が唱えられていた。本尊の十一面観音菩薩像は秘仏で、十二年に一度の午の年にご開帳が行われる。

ここには普門品供養塔や名号塔の他に秩父一番巡拝記念塔が見られる。秩父一番とは秩父札所三十四カ所の観音霊場巡りの一番の妙音寺のことであろう。

(6) 向畑立野の鈴木家路傍

正面には「庚申塔」と大きく刻まれた文字庚申塔（図22）がある。左側面（向かって右側面）には建立した四カ所の石橋の名前が刻まれていて石橋供養塔も兼ねている。

この向畑の立野地区では今でも庚申講があり、現在では庚申の掛け軸を掛けてロウソクを立て、午後二時頃から夕方まで懇談を交えて庚申信仰が行われている。

Ⅲ 旧大石口村

(1) 大吉香取神社

元は新方橋そばの現在の古利根川堰公園にあった。平成三年（一九九一）頃に現在地に移転したものである。旧・大吉香取神社の名残の石仏としては祠に納められている「水神宮文字塔」があげられる。

(2) 徳蔵寺

参道入り口には、向かって左側の角に力石が置かれている。

さらに成田山の不動明王像を祭るお堂があり、吉建講という成田講がみられる。毎年正月、五月、九月の各月の不動明王の縁日の前日である二十七日に地元の人たちがこのお堂に集まり、お堂を管理している築谷氏（大吉一一六番地）が先達として護摩を焚いて祈願している。戦前は越ヶ谷で「龍王講」と呼ばれる不動講の先達を務めていた故・川上泰信（大吉一〇三四番地）が行っていた。

参道入り口右側には大吉農業センターがあるが、その中には本尊の十一面観音像が安置されている。古くからこの現在地にあった。

境内には庚申塔が四基並んでいるが、うち一基は道標をかねた文字庚申塔（図4）である。正面には「庚申塔」と刻まれているが、左側面（向かって右側面）は「左 江戸道 日本橋六里三十三丁」、右側面は「右 関宿 宝珠花 野田 岩井 猿嶋道」と刻まれている。もとは新方橋を渡った猿島道（野田街道）にあったのをここに移したものであろう。

また境内の北側には青龍大権現文字塔（図7）がある。青龍山徳蔵寺の山号からとって名付けたのであろう。龍神は水の神であり、井戸の神ともなる。この石塔から前方（西方）3メートル先に井戸跡が残っている。この石塔を造立するにあたって大吉村の植家は勿論、松伏村、増林村、大吉村、向畑村の人々やこの井戸を作った井戸師と井戸側師の協力を得ていることが台石に刻まれた名前からわかる。

(3) 天満宮の祠

徳蔵寺西側の道路沿いに天満宮を祭った祠がある。その敷地内に「稲荷大明神文字塔」（図8）がある。

(4) 大吉調節池東側路傍

大吉調節池東側沿い路傍でT字路北東の角に「文字庚申塔」（図9）が建てられている。刻まれた文字を見ると、この庚申

塔を造立した人は大吉村の人だけでなく古利根川の増林河岸(寿橋下流二三百メートル先)の人々も協力したことがわかる。

(5) 豊代四ツ谷の天満宮

ここには光明真言曼陀羅を表した光明真言塔(図10)がある。光明真言の二十三個の梵字が円形に並べられ、その中央部には大日如来の真言の梵字も見られる。

IV 旧弥十郎村

(1) 弥十郎稻荷神社

弥十郎村の鎮守様である。「水神宮文字塔」(図1)を安置した祠がある。

(2) 「やば」の地藏堂

幼い子供の墓地があるこの場所を地元では昔から「やば」と呼び、幼い子供が亡くなるとここに埋葬されたという。毎年地藏盆の八月二十四日の前夜に地元の人たちがこのお堂を参詣している。この時、お堂にあげて短くなったロウソクを家に持ち帰り、出産の時にこのロウソクを使うと燃え尽きるまでには安産ができるという。向畑の「北向き地藏」と同じ言い伝えが残っている。

お堂の中には地藏菩薩像(図2)が安置されている。また墓地にはひとときわ高い八木橋家(弥十郎四三)所有の阿弥陀如来像(図3)がある。「施主 八木橋長兵衛」と刻まれた文字が見られる。

(3) 観照寺跡弥十郎会館

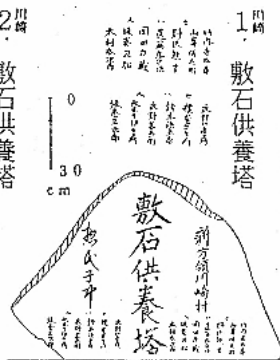
この会館には本尊の観音菩薩像が安置されている。

(図4)が祠の中に安置されている。境内西側の北端には向畑の十一面観音堂をば路傍にある「不動明王三尊像」と同時期に造立された「不動明王三尊像」

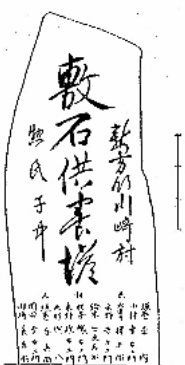
そして、その南側にはそれに続いて多くの石仏石塔群が南北一列に並んでいる。その中には庚申塔や普門品供養塔、出羽三山供養塔などがある。出羽三山とは湯殿山、月山、羽黒山をさし、弥十郎村の村人が出羽三山を登山し参拝した記念に建てたものである。

旧川崎村

1. 川崎 敷石供養塔



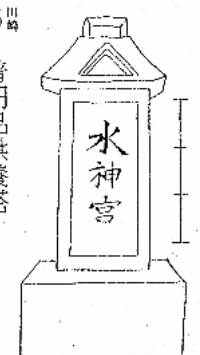
2. 川崎 敷石供養塔



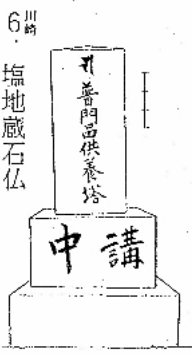
3. 川崎 仙元大菩薩文字塔



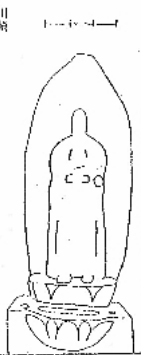
4. 川崎 水神宮文字塔



5. 川崎 普門品供養塔



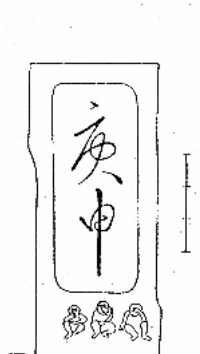
6. 川崎 塩地藏石仏



7. 川崎 文字庚申塔



8. 川崎 文字庚申塔



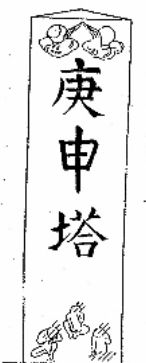
9. 川崎 道標をかねた文字庚申塔



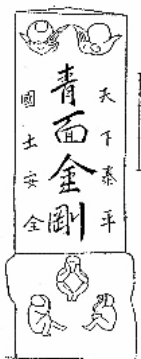
10. 川崎 文字庚申塔



川崎 11. 文字庚申塔



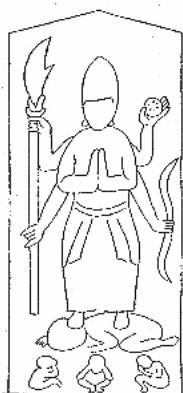
川崎 12. 文字庚申塔



川崎 13. 文字庚申塔



川崎 20. 青面金剛像庚申塔



川崎 21. 青面金剛像庚申塔



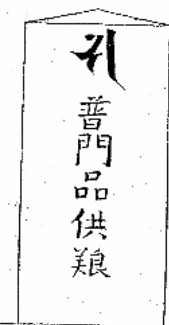
川崎 22. 湯殿山信仰大日如来像



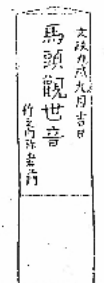
川崎 14. 天満宮文字塔



川崎 15. 普門品供養塔

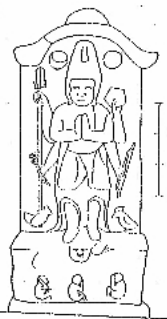


川崎 16. 馬頭観音文字塔



旧向畑村

川崎 1. 青面金剛像庚申塔



川崎 2. 文字庚申塔



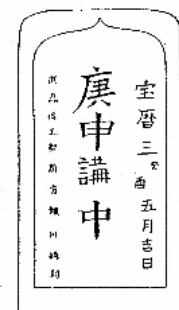
川崎 3. 『孝心』の文字庚申塔



川崎 17. 回國供養塔



川崎 18. 文字庚申塔



川崎 19. 馬頭観音像



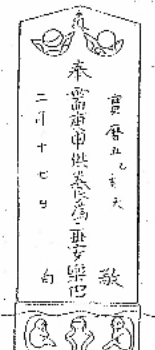
川崎 4. 三面八臂の馬頭観音像



川崎 5. 六地藏石幢



川崎 6. 文字庚申塔



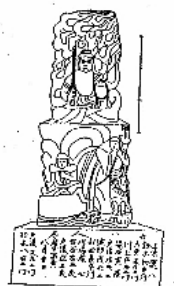
7. 青面金剛像庚申塔



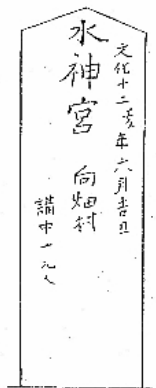
10. 文字庚申塔



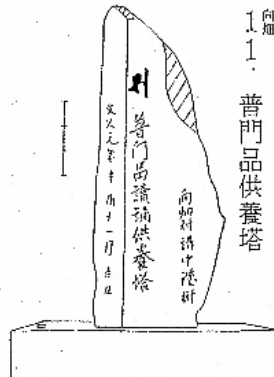
13. 不動明王三尊像



8. 水神宮文字塔



11. 普門品供養塔



14. 文字庚申塔



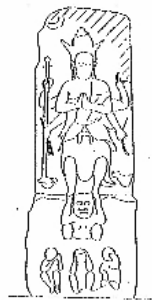
9. 北向き地藏菩薩像



12. 三十六童子文字塔



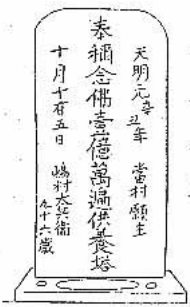
15. 青面金剛像庚申塔



16. 三猿庚申塔



19. 名号塔



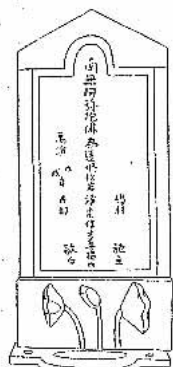
22. 文字庚申塔



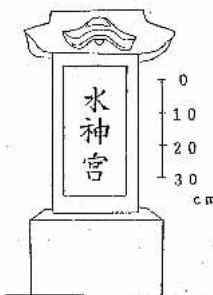
17. 普門品供養塔



20. 名号塔



1. 水神宮文字塔



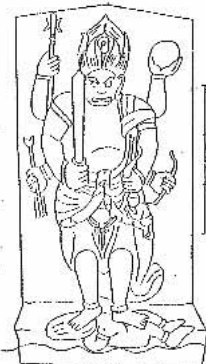
18. 秩父一番巡拝記念塔



21. 名号塔



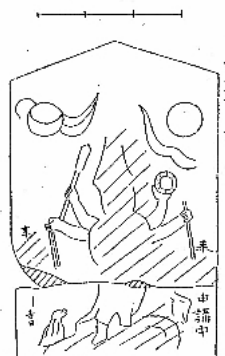
2. 青面金剛像庚申塔



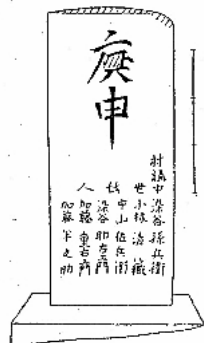
3. 大
文字庚申塔



6. 大
文字庚申塔



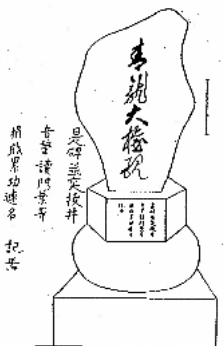
9. 大
文字庚申塔



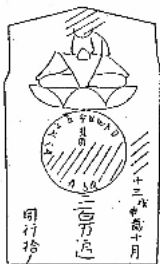
4. 大
道標をかねた庚申塔



7. 大
青龍大権現文字塔



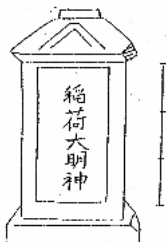
10. 大
光明真言塔



5. 大
青面金剛像庚申塔



8. 大
稲荷大明神文字塔

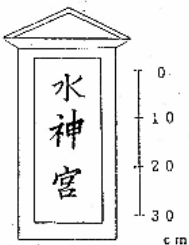


11. 大
青面金剛像庚申塔



旧弥十郎村

1. 大
水神宮文字塔



4. 大
不動明王三尊像



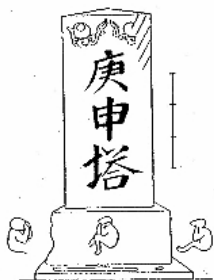
7. 大
普門品供養塔



2. 大
地藏菩薩像



5. 大
文字庚申塔



8. 大
出羽三山供養塔



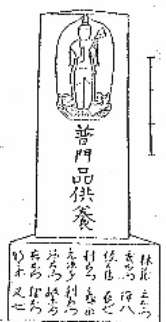
3. 大
阿弥陀如来像



6. 大
青面金剛像庚申塔



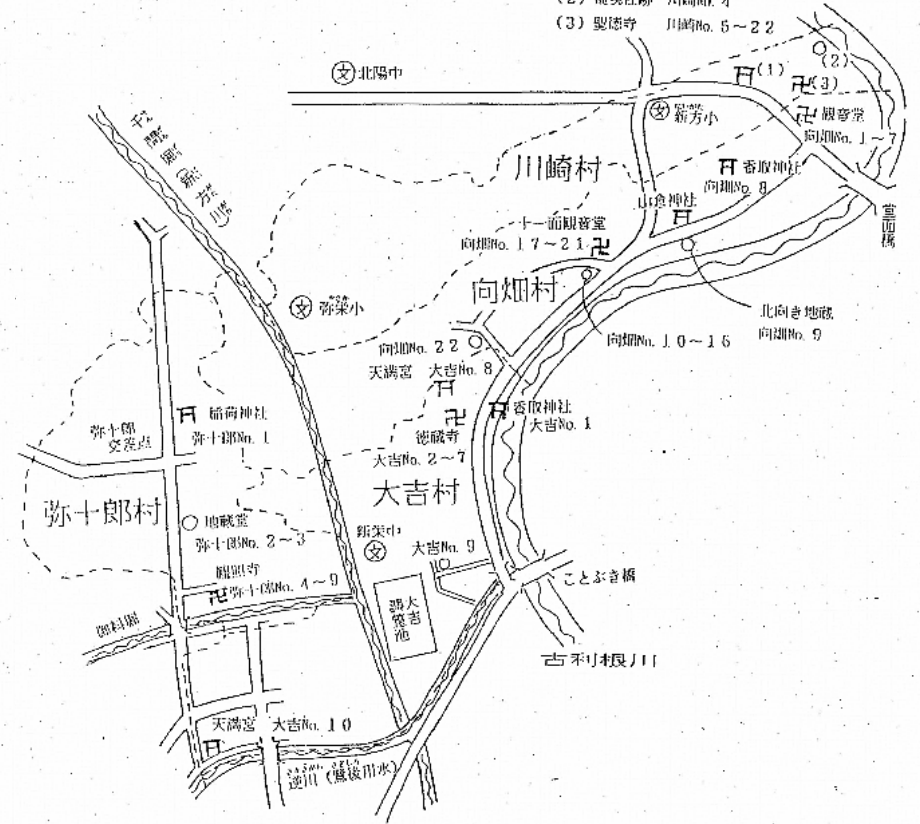
9. 大
普門品供養塔



旧川崎村・向畑村・大吉村・弥十郎村

石仏案内図

- (1) 川崎神社 川崎No. 1~3
- (2) 権現社跡 川崎No. 4
- (3) 聖徳寺 川崎No. 5~22



二 地券(明治初年の土地所有証券)

小島 誠

※明治二(一八六九)年

明治新政府は、版籍奉還により「年貢」を確保した。年貢は豊凶・相場の変動により税収が一定せず、これを改正する必要があった。

※明治五(一八七二)年

田畑の永代売買を解禁し、地価を定め、地券(権利書)を発行した。この年が壬申にあたるので、これを「壬申地券」といった。

壬申地券には土地所有権・納税義務表示・所有者・所在・段別・代価が記載されている。

※明治六(一八七三)年

地租改正条例布告。

今般、地租改正二付、旧来田畑貢納ノ法ハ悉ク皆相廃シ、更に地券調査相済ミ次第、土地代価ニ随ヒ百分ノ三ヲ以テ地租ト相定ムベキ旨仰セ出サレ候条、改正ノ旨趣別紙条例ノ通相心得ベシ。

壬申地券を基礎として、新地券(改正地券)①に切り替えられた。

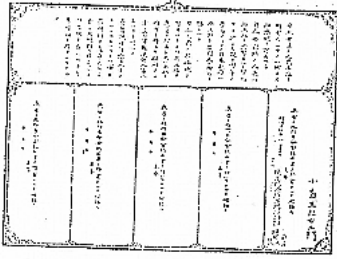
壬申地券では所有者がかわると地券の書き替えを要したが、改正地券では所有者がかわると裏書き②で証明することとなった。

新政府は旧幕時代の歳入額確保のため、地価の三%(のち二、五%)を地租として徴収することになった。

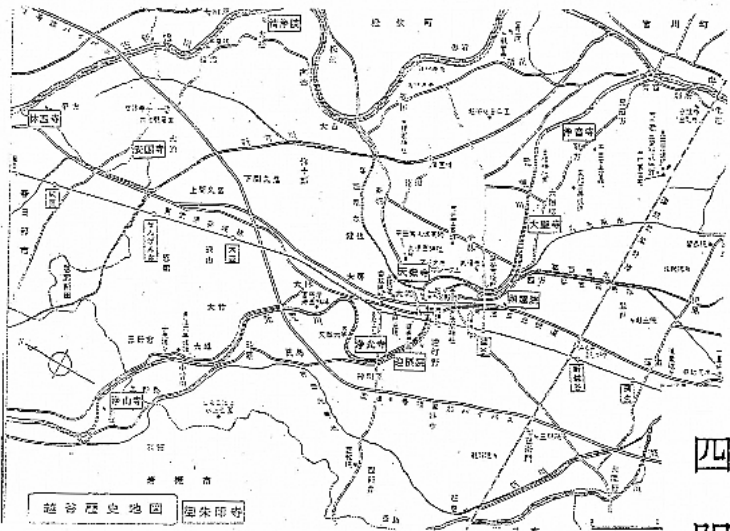
これにより、以前より負担が重くなったり、権利を失う者などがあって不満が爆発し、農民一揆の発生をみたところもあった。



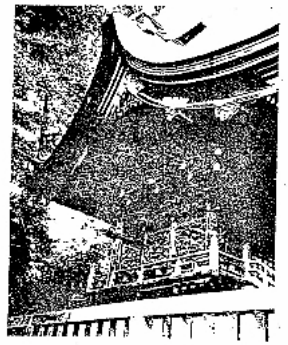
①地券 表面



②地券 裏面



大沢香取神社 参道



大沢香取神社 社殿

三 大沢の鎮守 香取神社

鈴木 秀 俊

遠い昔、越谷市域の元荒川以東は下総国であったといわれ、新方領旧村々には鎮守として多くの香取神社が祀られている。

大沢三丁目の旧四号国道西側の森の中に鎮座する香取神社は旧町社。

千葉県佐原市に鎮座する下総国一の宮香取神宮の末社で、建国の功神・経津主之神(ふつぬしのかみ)を祀る。

天保十一年(一八四〇)に書かれた「大沢古馬宮」には「当町鎮守香取稻荷大明神は、もと鶯後に造立されていたが、日光道中筋開けるに従い今の地に移した、との言い伝えがある。しかし今、本社の後に老杉の太木があり、よほど昔に移されたらしい。寛永(一六二四)以前、御入国(天正十八年)早々のことであろう。また、稻荷の祭神・倉稻魂神(うがのみたまのかみ)は、特に農家の信仰が篤いので新田耕地(高畑)の稻荷を合祀した」とある。

香取神社の本殿は昭和六十年十一月に改築されたが、四面に立派な彫刻(市指定有形文化財)を施された奥殿は、その棟札から慶応二年(一八六六)の建立であることが確認されている。彫刻師は浅草山谷町の長谷川竹次良で、高砂の翁・大黒天・龍等の浮き彫りと共に、それぞれ奉納者の名が刻まれている。北面の一部には、紺屋の労働作業の有りさまが刻まれており、貴重な民俗資料となっている。

四 明治初期の越ヶ谷の村落

菅波 昌 大

一、河川と舟運

越ヶ谷は低湿地で小河川が多い。河川の利点をいかした舟運は、物資の輸送へと発展した。村々では水害予備舟が備えられていた。

二、陸上輸送

宿場町であった越ヶ谷町・大沢町にはおおくの人力車がおかれていた。

三、農産物

越ヶ谷では穀物づくりを主として、甘藷・蓮根・蕎麦・菜種もつくられていた。

四、地場産業

桃は名高く、大林・袋山地区を中心に栽培されていた。農閑期には草鞋・蓆・吠がつくられた。伊原村の草鞋は有名で千住宿などへ送られていた(足立史談)。下間久里では張り子達磨の生産がさかんで、越ヶ谷達磨として関東各地へ送られていた。

五、寺社

越ヶ谷には数多く、九〇余りが各地に点在している。江戸幕府より寺領を安堵された御朱印寺は上記の地図の通りである。

明治初期（明治3年～8年）の越ヶ谷の村勢

村名	戸数	人口		馬・荷車・舟船	物産	寺社
		男	女			
花田	52	163	195	耕作舟(23) 荷車(14)	米・大麦・小麦・大豆 小豆	西門寺 稻荷社・浅間社
大沢町	450	1055	1071	小舟(35) 荷車(45)・人力車(75)	米・大麦・小麦・大豆	御所・御所・御所 御所・御所・御所
大房	63	156	157	小舟(5) 荷車(2)・人力車(6)	米・大麦・小麦・大豆	浄光寺 御所・御所・御所
弥十郎	34	100	110	馬(3)・荷車(1) 農舟(22)	米・大麦・小麦・大豆	福照院 三島社・天神社
増林	274	749	768	馬(5)・耕作舟(19)・小舟(3)・小舟(38)	米・大麦・小麦・大豆	東光寺 御所・御所・御所
小増	115	340	349	馬(2)・耕作舟(23) 小舟(6)・荷車(22)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・蕎麥	東福寺・西光院 香取社・神明社
増森	156	440	432	馬(2)・耕作舟(120) 小舟(2)・小舟(2)・小舟(12)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・粟・蕎麥・稗	東正寺 御所・御所・御所
中島	42	101	105	馬(1)・小舟(4) 田舟(16)・荷車(8)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・粟・蕎麥・稗	正福寺 諏訪社・稻荷社
大林	35	96	97	馬(3)・水子舟(4) 荷車(6)・人力車(5)	米・大麦・小麦・大豆 小豆	大徳庵 御所・御所・御所
大里	48	122	126	水子舟(14) 荷車(5)・人力車(1)	米・大麦・大豆	稻荷社・八幡社
上間久里	54	141	125	馬(2)・水子舟(14) 荷車(3)・人力車(5)	米・大麦・大豆・小豆	香取社・天神社
下間久里	55	158	155	水子舟(18) 荷車(7)・人力車(5)	米・大麦・大豆・小豆 粟・子達(石目)	香取社・稻荷社
大吉	32	82	106	馬(2)・水子舟(2) 小舟(25)	米・大麦・小麦・大豆 粟・白木綿・蕎麥	徳藏寺 香取社・稻荷社
向柳	62	182	204	馬(3)・農舟(11) 小舟(41)・荷車(2)	米・大麦・小麦・大豆 蕎麥・粟・蕎麥・稗	光光院 香取社
川崎	53	139	140	馬(1)・水子舟(13) 小舟(2)・荷車(1)	米・大麦・小麦・大豆 粟・白木綿	聖徳寺 香取社・菅笠社
大杉	33	100	100	馬(2)・水子舟(11) 小舟(7)・荷車(1)	米・大麦・小麦・大豆 粟・白木綿・蕎麥・稗	浄閑寺 稻荷社
大松	23	63	50	水子舟(3)	米・大麦・小麦・大豆 粟・白木綿	浄閑院 香取社
船渡	112	250	225	馬(3)・耕作舟(10) 水子舟(11)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・粟・蕎麥	福照院・常正寺 御所・御所・御所
平方	204	519	533	馬(5)・耕作舟(27) 水子舟(15)・荷車(8)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・粟・蕎麥	御所・御所・御所 御所・御所・御所
大泊	60	145	158	馬(5)・水子舟(15) 人力車(1)・荷車(8)	米・麦・大豆・小豆	御所・御所・御所 御所・御所・御所
大竹	58	158	150	馬(1)・小舟(16) 荷車(2)	米・大麦・小麦・大豆 小豆	御所・御所・御所 御所・御所・御所
恩間	58	152	135	馬(10)・耕作舟(14) 荷車(3)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・粟・蕎麥	香取社・菅笠社 稻荷社
恩間新田	58	152	135	馬(3)・荷車(3)	米・麦・大豆・小豆 粟	大目堂 香取社・稻荷社
大迫	78	212	181	馬(5)・荷車(2) 小舟(2)	米・麦・大豆・小豆 粟	東照堂・阿弥陀堂 御所・御所・御所
三野宮	71	175	178	馬(13)・荷車(3) 小舟(1)・人力車(1)	米・麦・大豆・小豆	一乘院 御所・御所・御所

村名	戸数	人口		馬・荷車・舟船	物産	寺社
		男	女			
麦塚	72	203	203	馬(4) 農舟(17)	米・麦・大豆・小豆 蕎麥・粟・酒造	智泉院 八幡社・女体社(2)
伊原	82	226	243	馬(6)・農舟(19) 荷車(1)	米・麦・大豆・小豆 蕎麥・粟・草鞋(7&2)	成徳院 久伊豆社
千疋	60	170	163	馬(2)・農舟(2) 耕作舟(35)・荷車(1)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・里芋・蕎麥	東養寺・薬師堂 伊南利社
別府	12	35	33	水子舟(7) 荷車(1)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・里芋・蕎麥	慈恵寺 久伊豆社
四條	35	104	95	農舟(1)・耕作舟(11) 水子舟(6)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・里芋・蕎麥	妙音寺 日枝社・天神社
南百	33	92	87	農舟(1) 水子舟(5)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・里芋・蕎麥	宝性院 水神社
見田方	57	161	174	馬(2)・小舟(3) 水子舟(8)・荷車(3)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・里芋・蕎麥	浄音寺 八幡社
東方	120	314	343	馬(14) 水子舟(13)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・里芋・蕎麥	観音寺・久伊豆社 天宮社・稻荷社
西方	188	484	519	馬(3)・耕作舟(11) 小舟(12)・荷車(8)	米・麦(7.8&8)	東光院・西光院 御所・御所・御所
蒲生	260	711	727	馬(1)・耕作舟(34) 小舟(12)・小舟(1)	米・麦・大豆・小豆	清徳院・光明院 地蔵院・久伊豆社
登戸	45	138	148	馬(1)・水子舟(13) 荷車(7)	米・麦・大豆・小豆	福上院 稻荷社・八幡社
瓦曾根	135	354	373	馬(22)・耕作舟(4) 小舟(21)・荷車(50)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・蓮根・蕎麥	福徳院・観音堂 稻荷社
越ヶ谷町	595	1370	1380	小舟(18) 小舟(29)・荷車(71)	米・大麦・小麦・大豆 小豆・雑穀・苧・苧花	天徳寺・海蔵院 八幡社・神明社
七左衛門	134	353	375	馬(7)・荷車(7) 水子舟(60)・荷車(6)	米・大麦・大豆・小豆	御所・三郎 御所・御所・御所
大間野	69	215	195	耕作舟(14)・小舟(14) 荷車(16)	米・大麦・小麦・大豆 蓮根	光徳寺・正光寺 三社大神
越巻	45	126	126	馬(7) 水子舟(12)	米・大麦・小麦・大豆 蕎麥	薬師堂 稻荷社・天神社
神明下	68	195	201	馬(5) 小舟(14)・荷車(16)	米・大麦・小麦・大豆 蓮根・粟・蕎麥・苧・御所	神明社・八幡社 天宮社・稻荷社
四丁野	76	205	206	小舟(7)・荷車(9) 人力車(4)	米・大麦・小麦・大豆 蓮根・粟・蕎麥・苧・御所	蓮花院・浅間社 安石社・久伊豆社
後谷	38	91	108	馬(2) 荷車(2)	米・大麦・大豆・蓮根 蕎麥	稻荷社(2)
萩島	138	390	400	馬(3)・荷車(16) 小舟(8)	米・大麦・大豆・小豆 蕎麥(1.5&8)	玉泉院・徳善社 安石社・稻荷社
袋山	86	230	240	馬(1)・荷車(7) 水子舟(25)	米・大麦・大豆・小豆 蕎麥(2840) 蕎麥(320)	御所・御所・御所 御所・御所・御所
野島	26	75	72	馬(2)	米・大麦・小麦・大豆 小豆	浄山寺 久伊豆社・熊野社
砂原	67	181	184	馬(5) 耕作舟(2)・荷車(6)	米・大麦・小麦・大豆 甘藷	久伊豆社 稻荷社(2)
小曾川	49	126	126	馬(1)・荷車(5)	米・大麦・小麦・大豆 甘藷	慈恵寺 久伊豆社・天神社

五 火消ポンプ 竜吐水

谷岡 隆夫

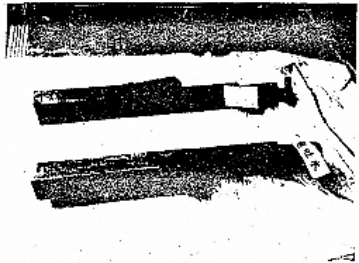


写真 1
下が天保6年の水鉄砲型
竜吐水

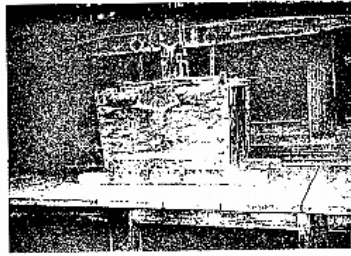


写真 2
明治30年の木箱型
竜吐水

江戸時代の消火器は、水鉄砲型(写真1)が主流であった。越谷市内では市郷土収納館所蔵の天保六(一八三五)年の最も古い。市内大房の藤井家より寄贈されたものである。長さは九〇目。この水鉄砲では、大火に対して効果は望めなかつたろう。

明治になり、水鉄砲型は木箱型竜吐水という消火ポンプにかわつた。竜が水を吐くのに似ているのでこの名前がついた。当時、越ヶ谷住人で細工職人「花屋寅吉」の製作による二基の竜吐水が現存している。

一、市内西新井・石神井神社境内にある竜吐水(写真2)
明治三十年酉一月 花屋寅吉の銘がある。

二、市収納館蔵
明治二十一年子三月 越ヶ谷一五〇号地 花屋虎吉作の銘がある。

この地番は今はなく、その後は不明である。

明治時代、各村に配備されていた消火ポンプ・木箱型竜吐水は、性能のよい車つき鉄製施用ポンプにかわり、竜吐水はほとんどが処分された。

市内で残っているのは数基にとどまる。

これらの製作者は花屋寅吉のほかに油屋清治郎がいる。油屋清治郎のご子孫は、現在、春日部駅前で加藤仙蔵氏が屋号を油屋として、水道設備業を手広く営業されている。清治郎の墓は春日部真蔵院にあり、操輪法信士の法名で、静かに眠っている。

六 東京周辺の飛行場群と幻の越ヶ谷飛行場

戦後五十二年目の検証—— 高橋 清

一、東京周辺の飛行場群 東京地区防空態勢 図①
本土の重要都市をまもるため飛行場が配置された。

飛行場を有機的に結合して「航空要塞」とする思想があった。

都心周辺に高射砲陣地、その外周に探照灯、そのまた外周に防空戦闘機隊(飛行場)が配置された。

海岸線には対空監視哨、洋上には監視艇を配置し、その先を海軍大型飛行艇で監視飛行をして、防衛司令部へ情報を刻々おこつた。

二、幻の越ヶ谷飛行場 当時の飛行場概略図 図②

関東地区に展開された飛行場は、台地上の平地林をきりひらいたり、桑畑を蒔いたりしてつくられた。

水田をつぶしたのは「越ヶ谷飛行場」だけであった。

総面積 二〇〇畝(二〇〇町歩)
滑走路 幅六〇m 長さ一五〇〇m

昭和一九年六月 着工 円形・万能・鶴嘴・鍬・トロッコ・モッコ牛車・トラックくらいの道具と多数の労働者・周辺の勤労奉仕隊の人力によって作られたということだ。

大型機械をもつ米軍とは雲泥の差である。

終戦直前に完成したが、ほとんど使用されず(飛行機が着陸したのは一回)、地盤がよわく、滑走路がうねって、着陸時にバウンドして滑走路からはずれてしまったという巨弊談がある。

図一 終戦直前の東京周辺の飛行場群

図一 東京地区防空態勢図(資料参照)



図二 終戦直前の東京周辺の飛行場群

図二 終戦直前の東京周辺の飛行場群

図二 終戦直前の東京周辺の飛行場群



鬼子母神の石碑
観照院



鬼子母神 跡地
旧出羽村



図二 幻の越ヶ谷飛行場 (当時の飛行場概略図)

七 疫病と鬼子母神

名倉 さわ

明治、大正初期、出羽村。

そのころ、なまの物を食べ、なま水（井戸水）を飲む。

川の水でたべものを煮炊きしていた。

夏には疫病が伝染して、子どもたちは、医師の手当ても受けられず、亡くなっていった。幼い者たちは下痢や腹痛をうったえ、高熱におかされ、家族に看取られて、一夜にして命を落としたそうだ。

明治時代は疫病をおそれ、遺体を火葬にし、病原菌をなくそうとした。人々の力で子どもたちの健康を守ろうとした。

成長する子どもを案じて、仏にたよることを考え、子育ての神・鬼子母神の石塔を建てた。

村人は鬼子母神に詣で、木々のうっそうとした中に足をふみいれ、供え物をしては足早に去り、子どもたちの健康を祈ったとか。

今では、その頃のことを知る人だけの話題としてのこっている。大切にされた鬼子母神の石塔は、現在、観照院の六地藏のちかくに移されている。

毎年、地藏盆の施餓鬼に卒塔婆がたてられ、寺と町民のあたたかい心によって石塔は守られている。

現在、滑走路は幹線道路となり、集落がつくられ、当時の兵舎は自治会集会所として使用されている。

戦中の駐屯部隊 第二六野戦飛行場設定隊

燕第二四〇七部隊（昭和一九年豊橋編成）

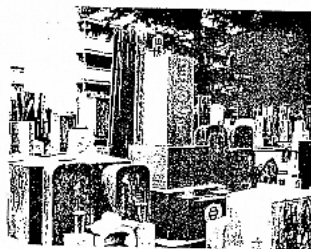
参考文献「戦中の西高は飛行場だった 越ヶ谷飛行場についての調査」

調査」

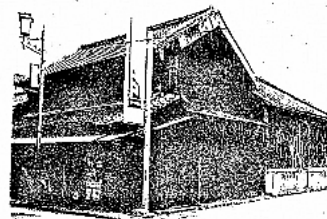
越谷西高校社会部発行

「陸軍航空の鎮魂」

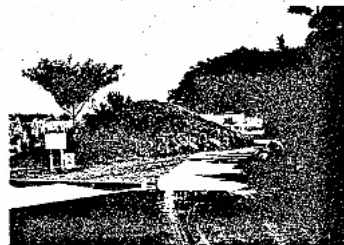
航空碑奉賛会発行



堀家代々の墓
菩提寺は 市内天岳寺
墓地の管理は会田家で行っている



旧越ヶ谷宿本町 名主堀伊左衛門宅
(現会田金物店) 現建物は当時のまま
写真は会田家の協力による



開山塚



清浄院の本堂

八 大松の清浄院

西田 茂

浄土宗・芝増上寺末・栄広山浄土寺と号す。

寺領十二石は慶安元(一六四八)年九月十七日賜う。本尊阿弥陀を安ず。立像にて長さ三尺(九〇cm)ばかり、恵心の作といえり。

開山堅真、宝徳元(一四四九)年七月二十八日示寂す。

当寺の東、少しばかり隔て開山塚というあり。そこより掘り出せし古碑に、嘉禄元(一二二五)年の文字見えたり。是、起立の人の碑ならんという。鐘楼、宝永七(一七二〇)年の鋳造の鐘を掛ける。

(新編武蔵風土記稿第十巻)

開山塚

文安四(一四四七)年の春、桜の花見に湖畔を訪れた栄広山住僧堅真上人の前に美女が現れ、跪いて「私は三頭一尾の大蛇にて、野木上野亮の妻であるが、結城の人と我が身母子主従を滅ぼした將軍義教への怨みは、骨髓に徹して忘れられず、嘉吉元(一四四一)赤松(満祐)殿の怨念に頼り、將軍を殺させて恨みを晴らしたが、王者尊貴を弑いた罪で湖辺にさまよっている。願わくば仏の慈悲にすがり成仏したい」。

上人は大蛇の悲痛な訴えを聞かれ、文安四年三月二十一日、御堂法会を開いて、七ヶ日の大念仏修行をする。

二十六日夜半より一山鳴動し、夜が明けてみれば湖は岡に変じていた。驚いた人々は蛇塚といい、開山塚とも称したという。

(六ヶ村栄広山由緒著聞書)

九 近藤勇 越ヶ谷宿にて逮捕

堀切 祥民

「綾なる流れに、藤の花匂う、わが生涯に悔なし」彼が綾瀬川岸の藤棚の下で詠んだ歌である。さて、彼は天然理心流宗家の四代目として、文久三年土方歳三らを率いて幕府浪人組に応募し、新撰組を旗揚げ京都市内見廻り役を任務とした。

所謂池田屋事件の後、慶応三年朝廷方に味方した薩摩藩は江戸で挑発、將軍慶喜は翌四年討薩軍を揚げて上洛、鳥羽伏見の戦いで新撰組は敗北し江戸に敗走した。

二月末甲斐への出兵命令を受けた彼は、甲陽鎮撫隊を再編成し勝沼で官軍と交戦したが、再び敗北。四月二日、名を大久保大和と改名、幕府治安隊(実際は新撰組残兵)として、流山の醸造業長岡屋及び光明院等に移動した。三日、官軍(香川隊)はこの情報を察知し流山を包圍、彼は恭順な態度で接し、浪人取締りに関して相談したいという誘いに、土方歳三は諫めたが、官軍が指定した越ヶ谷宿名主、堀伊左衛門宅に同夜遅く発ち、单身矢河原の渡しから早稲田、吉川を経て、越ヶ谷宿に四日早朝着いたと推測する。

彼は名主宅で治安隊だと主張したが、近藤勇本人であることが発覚、奥座敷で逮捕された(越谷今昔物語)。板橋に連行途中、市内大間野関根宅(よしすや)の弁天藤で休息、この時詠んだ歌を冒頭に掲げた。同日、「孤軍援絶伴囚、顧念君恩涙更流、一片丹宸能斬首、三五年の短い生涯を閉じたのである。

歴史好き、好奇心一杯のあなた！ ぜひ、お仲間になろう！

あなたの余暇を、ちょっと高尚で、楽しくて、そして健康にもよい『趣味タイム』に使ってみませんか。

越谷市郷土研究会とは

◎史跡めぐり・初歩の歴史講座・研究発表会などのイベントを、年間を通して催しております。

是非あなたもご入会のうえ、余暇の時間をもっともっと楽しんで下さい。

◎当会は、昭和40年(1960)3月に発足しました。

以後地道に活動、現在は、会員の方が170名を越える規模に発展し、当初から行われてきた研究発表会は平成8年11月現在で114回となり、史跡めぐりは235回を数えるまでになりました。

郷土研究会にお入りになりますと

◎すべてのイベントのご案内をお受け取りいただけます。

せっかくよい行事があったのに知らなかった、ということがありません。

◎会員だけのための特別行事に参加できます。

郷土研究会のイベントの中には、「広報こしがや」などに公開していない行事にも、会員の方に限りご参加いただけます。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間2,000円(会報・諸案内状・諸会議費等)です。

どなたでもお気軽にご入会できますし、市外の方でも歓迎致します。

◎お申し込みは、お葉書に「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・年齢・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。

または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343 越谷市 宮本町 3-117-8 谷岡隆夫方

越谷市郷土研究会

◎電話でのお問い合わせは、☎0489-62-7527 谷岡隆夫(当会会長)まで。

十 越谷市内の火の見やぐら

火の見やぐら調査グループ

○池田 仁○高橋 清○高山はつ○武井福三郎○谷岡隆夫

○中村林也○野村勝八○原田熊蔵○宮川 進○森田三郎

○山崎政隆

「半鐘どろぼう」という言葉をご存知ですか。高い「火の見やぐら」に吊された「半鐘」を手をのぼしてとれる背の高い人のことですから、今でいえば、アメリカのバスケットボール・ドリームチームのメンバーですね。

ところが、「火の見やぐら」が使われなくなって、このユーモラスな言葉も死語になりつつあります。

私たちの越谷市ではどうでしょう。ここでも「火の見やぐら」は受難のときを迎えています。一番多いときには、五九基あったものが毎年すこしづつ姿を消しています。

周囲に高い建物が建ったり、連絡も電話や無線の時代になって用がなくなり、借りていた土地は返さなければならなくなったりして、一基また一基と取り壊されていっているのです。

現在は三七基が残っているといわれていますが、その減り方は非常に早いようです。

これまで、「火の見やぐら」は、私たち住民にとって頼りになる、そして生活にとけこんだものでした。このまま、市内から「火の見やぐら」がすべて消えてしまうのを見送ることは心ざびしいことです。

「火の見やぐら」も、一つの文化です。消えていくのは仕方ないとしても、せめて、写真に記録し、思い出を残しておきたいと、私たちは思いました。そして、手分けして、写真をとりはじめました。現地へ行ってみると、あるはずのものが、もうなくなっていたり、また、あるはずのないものを見付けたら、いろんなことがありました。

ぜひ、皆様も、これらの写真をご覧になって、「火の見やぐら」が役に立っていた、のんびりした、懐かしい時代を思い出してください。